

平成27年度北海道男女平等参画チャレンジ賞贈呈式

懇談内容

日時：平成28年2月17日（水）14時00分～14時30分

場所：北海道庁本庁舎3階 知事会議室

長岡行子さん（出張理美容サービス VESS 代表）

今回、私を通して、いろんな方が手をつなげていって、笑顔あふれる街になっていければいいなと思い、応募させてもらいました。

今日、社会福祉法人真宗協会特別養護老人ホームの施設長と一緒に同行してくださっているのですが、今、社会的に話題になっている老人の認知症の問題などを、多くの人たちがそれを“問題”として取り上げていることに対して彼が言った、「何で“問題”なんだろう？」という一言が、ずっと頭に残っていました。地域の人たちが手を取り合って、知恵や工夫をつなげていけば、それは“問題”ではなくて、“ステップがつながっていくもの”に変わるのではないかと、ということを実感し、日々、仕事や友人関係の会話の中でも見いだせるところがあるので、それを少しずつ、また活動につなげていきたいと、特にこの賞をいただいてから思いました。どうもありがとうございます。

高橋知事

今、おっしゃられた、認知症の高齢者の方々に対するお話については、確かに、それは今問題なんですね。多くの方が高齢化社会の中で、その方々を孤立させることなく、地域のみんなでサポートしていくということが正解なのだと思います。そのことを、この VESS の活動を通じて、どんな形でこれから活動していこうという思いがありますか。

長岡行子さん

活動の一つとして施設長が考案された、施設の利用者さんや地域の方々交流できるカフェを施設の中に作られているんですけども、こういう場所のように、地域の皆さんが、それぞれに困っていることや問題とされていることを持ち寄って、ケア・サポートの方々や施設の方々、地域の皆さまができることを持ち合ってお話しできる場が、帯広市内のところどころにできたら素敵だなと思います。

高橋知事

いわゆる空き店舗の問題や、最近では、商店街などの有効活用もありますね。

十勝エリアというのは、障がいのあるの方々に対して、特に優しい地域づくりをしておられるという認識が強いです。去年、根室の農福連携という、農業の場で障がいのある方々をサポートする活動も拝見させていただきました。おそらく長岡さんも、帯広・十勝内で情報交換しておられると思うのですが、帯広の方でも、例えば精神障がいの方へのサポートなど多様な活動があります。やはり、地域の特性や地域の方々の思いというのが、うまく積み上がってきているのかなと思います。これからも、是非、ご活躍ください。

長岡行子さん

ありがとうございます。

皆月代表（釧路公立大学皆月研究室 マタニティ・育児支援アプリ開発）

私どもの研究室では、2010年から、5年にわたって、地域のヘルスケアなどの部分にフォーカスを当てて、育児支援であれば、「おっぱいですよ」というアプリの開発や、マタニティ支援であれば、現在有名になってきている「陣痛ダイアリー」というアプリを開発しております。

5年ほど活動してきましたが、なかなか開花しない時期が続きまして、何が悪いんだろうと3年くらい悩みながら続けていましたところ、今日隣にいます、土田栞という学生が公費のカナダ留学から帰って来たときに、彼女から、「先生のやり方ではうまくいかない、ラボ（研究室）で作っているだけでは、地域の人々に受け入れてもらえない」という指摘を受けました。当時はすでにインターネット社会でしたので、開発したものを単に置いておくだけでした。それでは、ダウンロード数はあっても、なかなか地域の実情をつかめないですし、ユーザーがどのような意見を持っているかもつかめない、ということを具体的に彼女から指摘されまして、どうすれば良いかと考えたときに、私（土田さん）が出て行きますということで、開発したものをプロジェクト化して、投入してみようということがきっかけとなり、2014年からの2年間で、つぼみだったものがようやく開花しました。彼女は、これで卒業ということになりますけれども、これからも続けていきたいなと思っています。

釧路・根室エリアは、岩手県の面積に匹敵するくらいの広さがあります。もともと私のベースが社会安全システム工学で、津波避難とか道民カレッジもやってきましたが、その中でもやはり女性の支援や避難誘導という地域の問題がありました。それと土田の意見が、ベースの部分でちょうど一致したことで、今回の社会での評価につながったのかなと思っています。

高橋知事

具体的に、この改良版の陣痛ダイアリーというのは、どういうふうに妊婦さんをサポートすることになるのですか。

皆月代表

今、こちらにそのアプリをお持ちしておりますので、土田が高橋知事の隣にいきまして、少しデモをして説明をさせていただきます。

土田栞さん（釧路公立大学皆月研究室 マタニティ・育児支援アプリ開発）

（知事の隣で、実際のアプリの画面を見せながら説明。）

高橋知事

こういう風な形でサポートしていくのですね。わかりました。
とてもシンプルなんですね。

土田栞さん

そうですね。最新版では、ペアリング機能という、パートナーやご家族の方とデータを共有できるような機能をつけることで、単なるツールではなく、家族や利用者がつながることを目的に開発を進めています。

高橋知事

わかりました。ありがとうございました。

この「おっばいですよ」というのは、授乳間隔を知るということですか。

皆月代表

授乳間隔やおむつ交換の回数などのデータが、タブレットやスマートフォンに記録されていきまして、それが今、土田が申しましたように、お父さんやパートナーなどが夕方に帰って来たときに、そういう記録を振り返ることによって、お母さんががんばったんだね、などというように、コミュニケーションにつながるということを目的に開発しています。

高橋知事

大変興味深いご研究で、是非地域の皆さん方の安心安全につながればと思います。ありがとうございます。